特別
リ5
12432
18

大國祝詞古之傳記

藏四國造祖　松山彩物
中臣小一命　竹中宮兵衛尉
日祝部兄弟　毛受藤助
思田助右衛尉　和田助大郎
浦野孫次郎　赤一常之
古田大船大夫　簾思田右衛尉
浦尾節刀兄弟　稲葉兵衛尉
板倉伊賀守

特
115
12432
18

58 2129

宮城県立図書館

大同記十八

小流南蕃芭蕉淵編

○織田酒造亟

永禄之比織田酒造亟と云一人尾州下部人也。仁義之誉あり。真忠之志篤し。三州小豆坂之戰の時一人にて敵を引受て下知此人也。

むかし酒の造り方家族或朋友不とに蜀漢ら生し事ハ古者唯古代格あり。格かに労苦ハ人也。此人こゝ思ひ一処にうゝ人詰て羅(ラスモノ)と打ひ一座うゝに物うゝ変。格かうゝに

闘ふ者とハ、なほ国つ国の人ぞ。
そなたりの合戦く猟人
猟者とも拾ひて。新参
ちなほとも。そ程くに沈ー重ね
こゝろくに居ハ。ちそん一矢
立。戦切そ響をはすくそ。
こあ。而後よりて義経弓張月に対も
自然そ紙度ものうし。法皇を此影を
くおもそそ有ーそと云まんす。偏に死
辱なるこーと。地軍中。そなたやーんを後

振切も定よ閑にせそ戦ひそ。義経他
の者ども人をそにも。自分ある歩ちを知彩
地軍を已獲れ切もにの中ー労ちり。
是をうきあ者ちと。そ。寂初徒六家
つき付りしー。左様のすにも。遠を。唯
冥加人乃面うにあ。ーう安立乃者
事にをそそハ。時しあ生ーうも
有ーとりう。宰人弦能あくれミ分
と弦も振ひ立。主君乃そあよ能人を
く乃く。家。あ能りくあ有ても

ものの黨なく。貧窮を恤しつゝ家を治め
夕出の人にに公計一業の振ひにく
もつぱらなる者にあらず。諸人の
期待なるすゝ知者しつゝ思ひのまゝ
已百二人れ知せ知者しつゝ勤めをし
なしひとりやゝ。因て此人乃下志をし
俗もいるまんと思ひん。爲なりしーを

○和山新田

永稼年中に和山新田と云しこゝ家

をひく所分を知る者ハ。初中
新寺に叢ちゝをはたらしし。素
性ゆうよやけく毎日ものやに夢て裁
判もわさしもうの小敵天八罪被を免ー
法師也して無者ハなりを法泉
別懐を使にしく家を家
或を家にをひく通者者た。此新田
を呼ハ。西者く字出ん。なに戦場を
下山野分なり。窓にを八家をし号を
何を移せんや。唯地ハく求ハ程ひ戦きん

ヒヒ作く。歌味宮場の南北より狩倉を
あし一奥を行時ハ必ず杉山をいさりて入出
越一なりと。うの作くしよ戦場の
ゆ一ゆ。り年ニ十五三之
知ゝ坂あんてゆ
ゝ。武士修りしく
来ニあ家へ有ニに。橋川有ると者。尚
くはと之ニを合戦ニ。迫付首一討物
一ゝ。ゝ武家を強く強撰ニ。竜巻ハ
山なゝ一と。蓋を白を後ハ五十石余ニ地
を知行ニ国て。名を拾ハ傍家のやに

家あ一二ゝ家人ニ勢を毛ニ也ニ。ニ年に
幾内にをひく隠生ニ不義者を見死ニ都
兵ニ支林又岩水絶林と道ハ山を中村新ニ岩水絶中村三田
原ゝ一ニ弟九郎ニ中西信ニ岩成合又宝
沢谷基ハ郎井中蛙助市田若目分小河新
右ニ馬林保ゝ楽ニ京久井助ニ。一人当
ゝ九いと生つゝ。ゝ見ゝ兵月新参
抱ニ生縫ゝ書ゝ見ゝ。ゝ作ゝ拾
骨節ニお取ゝ。ゝ新助志ゝ好を見
人語一ハ。他ニ戦功ゝを思ひ入

奥士に八百余戸を新しく深うす

○中条小一郎

永禄之初めより八弦坊宗四郎八幡宮を建立せらるべき
筋なりとて十三年の春より造営を始め
弦の中に数人の時分を知らず長日月
有為無常なる世の人作り足りしんと坊と
たり十人に一人なりて寡しく頭をたれ
ず。
十人の内なりて病ならざるとし勝れ口
とりとりの歩く不叶しと徴田弦こう丸
鍛一郎ばかり。所詮人命無常と案じ初給と案じ

○竹中半兵衛尉

此竹中八郎引美掃部助重治と仕へ
身長十四五寸にして武勇の者。人と語ること
まれなる程さしいも多くなく。眼さし
みとも一度有て度量八幡宮の如くなりとも
ばかりに見えし。暗しらしす。おこりもき
事所変へ行く。極く立ちなきなりたる
ばかり。ぶく物とも、こうしらしう。偶立八
に勢ばかりぶ作にも不尽ぶ作にと腸を
正し悔一筋なく綾色なく勢なく。

傑やく地位二十余の中より抜く足し初し。
戦働しかるに八郎なる島に来。市郎あと
云刀元宣と常に比べくにはくあくとぬきうち。
を義は丸わつぶ深にて八甲八号の
あさ黄の木綿糸にて立。甲八号の
立物打て仮紙指首に巻き付ら
黄えて木綿筋帳と。もとおくるもら
ちくと打ちしーなり。室に電雷ちく落
出九不動。藁ちく起出九日不眠神に来
せにしも。出軍仕。

えれ八新ちせとんの中に不動尊
月紙に仕せーなり。此人魁愛にもー付八。軍
中何とかうと長んしれ。此人此者長八弦
大風ちにのり。国中ちくもちとるーにて久ま
りしき屋うーえ。行中おり少腹ちち腹
立ー洗国ちくも。耳目を為ると行のすを
ちくちんせんと。薬ちり。病薬ちく滅と已ちて
手柄とい。ちに義うんとなる度ー。先人賞にお
立ー宝邦久作をおち病毒発と秘密ー者
病乃ちちと云て寄ちち人ちとさも至

一ヒとして三月ナリ唯一人也城一番所なく
廣野に入れと呼ぶ敵強弓数挺
幾ヒ並居たり一を上ると作と云へ
ヒとめきうちに打ちたりしかとうちと云
うちうちくめき合也戦しうち雑ぶく敵
陣を切伏命を捨て切出る人々数伏くたり
防奥こハ口打幾切出ましさ切ん
と云めれ知へ口を長井新八郎新
たうこうめとうし陣を行中一人を見捨てハ
有へうとて某ハ阿一と兄弟切く

刺ク行中ニ吉ハ為ニ敵ハ六七人ヘ一者ハと陣
一合を散に戦て兄弟忠死をしたりと。
吉ハ為絶乃丸を上種ハ義しうと。
お国ニ勢ハ義伊勢国長井ニ多勢
二の陣ハ喰と云よ。敵奥へ使ハと云。
下ヒ一所へ行ク時を移ハ不し。この打果ゆ
ハたを上ハ攻の忠義者ハ有すりや
と。陣場退ヒ一を使ハ立ハ打ハ
城を二成ウうちハ信長ハ此吉ハ稲葉山
を攻一番ハ信ハ中国下

後拔抽て吉田内膳有りける。他国へ扶持
出ず。然れども。後難難もなれとて。菊丸同
心せられしが。弱年なれども。此龍男へ場を迯
れ。後信長公へ事へ奉りて。秀吉秘蔵
と。屬せり。此秀吉は。稀代の
雷害雷神有り。杉谷野田辛七郎孫
弱者なれども。豊臣秀吉は。ひきまて
知恵と。勢とを。推おさんと。有りを。
いや。あの勢は。弱者なれども。
あるを。合戦を。見ひてめ。勢を。大器を。

を。見ず。所詮。わるとや。ものさとを。後へ引とさ
せるを。合戦を。とる。者は。一人も。出ず。なれを。
雖。来線情。とうちうと。後しし。なるとを。
て。後へ引と。後は。国くに。有りを。に。
言ひて。後に。向くず。まて。
兵法合戦を。文八。其に。御伽。思
計なるに。立て。
節所を。あよあく。一見も。おさまら。鉄砲を。
矢を。射て。学く。第一。変。敵。編りまら
を。立て。十万に。引付。ぬ。て。や。射。や。考

ミト所ニ二十騎計射たてたる足ハ足ニ障ヲ
易ヲ足ニ切ル。孤れ和移を懸て二人ヲ射
を倒を倒ヲ射ヲ倒ヲ射ヲ倒ヲ射ヲ

尼仏乃て方三所條よ梅僊に以秀石てに
宮大脂りを とゐて此僊も武四つ勢に拔ひ
獵ひ〜と下ゑ尼仏乃て方中いや〜
あ乃僊ハむて津〜收ろ人き勢ロ口ポ毛もく〜
僊を國ろ二の私と云ふ大脂ハいろ〜云ふ
考ろ人ロ敵乃面ゑ所ひ味方て勢ども
僊と云ハ一の私ひろんと云ふ云ふ海面て
あ〜ろろんと云て。編せ〜と。秀石ゆ
ろふく何を角ひいろや。勢ハ毛ひ弟
ろろ〜とて大脂伝の西勢とろひ

ゑ私ゆ人ゑ米ろ勢ゑ中ハ不勢弟
僊を弱くし有ひ有ゑに ず付も米ろに
獵私僊を元て津ゑ悔〜う八考ろ勢
も赤元乃津ゑ面〜 ゆ毛ろ米る
ろ〜の面ろう〜私ハ梅も右ハ拔ゑろ私
ろて ろ〜ろろ人きに毫て 矩四ゑ
尼ろに元ろ人脂ゑ か病て考ろ目
由元〜ひろ。ゆ毛米米筆勢ハ〜さ〜
〜きろ人ロと歩ロ宋ゑ〜ろ。元て表撞紀
ろ長と新米ゆ人と思ろんも ひく。仏て編

を求めあるいはさんたるやそのにも上不しよ
ありてただ紙に伝ふるよりほかなる事も有しと。
初一き
或日本与傍十九家にて酒宴をなす家ごとに
人々笑悟をいろ〳〵の物語りなどして
遂着。自然に行て不知不覚有しを
いかなるにもかゝるしをかなりと多く
附会し。おのゝ城にて小説の話
ひしも。亦不宜事。行中もさんの好を
能暁察し。書室にいにくの門を見出
ひ求めるやいなや。世に未為世
しくして及諧謔にて偶倡と出て
学問者さすがとぞ思ひ侍りき。東
海道奥に学し。深山幽谷に住り。彼年
そ城を乗物に八北俊史紀伝人事い
くあんやと。牧野孫十八家にて書記
練書有し。実に理に暁通かれ家相も。
と思ひ侍りにて数。又詩奥にて上於而
多く作中の跡に暁通有しを
記す

○日和北兄弟

日根野備中同郡佐野村と云ふ兄弟ハ剛強
国人也。国中にうとましかりしに、ある時
太閤、備中出陣の時、此兄弟右衛門尉と
在郷の孫四郎を誅伐せ男右衛門尉ハ家来
数人を二方に分て、此起ハ取籠もり、此
内に下人を弟を基光をして国中を家
籠ハ焼て仕ク堪忍して、大ようにて仕
り、ポ之偽ると、孫四郎の仕合と勝
と成ハ、下ハ、人を、ヲ、悔て、此儀を

とり、ハ、ハ、ハ

毛受勝介八尾刑部丞日井郎稲葉村人也柴田修
理亮勝家に十二歳のときより事和後八幡社
に任し給一万石地を素性信篤く古風なるもの
母は孝を勝家故小の打節舎兄義春馬廻佐
竹に忠死と使ひ給へ名たかく成て順受
に仕先年くに奥七を懐低し旅人宿に出て深
く身を改新忠死六て果し給へ

○畠田物右衛門

加藤左物語に畠田物右衛門八尾城

主の井郎小懐の人なり武勇を色に顕す真な
る事義人なりしを和りき平色に特く
有て花車風流を第一とせり日夜こころ
早俗を風流にて
その内に加りの者人を武名を高く
一生を風流を同じ。実を忘るあん
うを思ひ入なり。多賀の下方を打
徒に方紫雲修理亮の度畠田物右衛門の度
さうそくを八幡宮初詣をする。
ちを徒の中を物右衛門

くろくて赤面有り。昔、人々うち和にて綿と
てうそ合せよりて是れ分にて
しのとをハ甲乙の義六器田の名所とそ
をうの風うちうち。世つるの人ハ
脇とうたれ汁に紅
相と風体ハうとうと有人
（きやう）ゝ婦うちをて思
屋ゝうこて屋ゝ有て
なうて

○和田氏大節

同比和田氏うと云ハ濃州西方人也。常平
婦人乃屋ゝに屋さしく
き。戦場にて敵愛
と勝とハ
和男にて有よと。光家ハ
浦壁名様也見和地見日ハ野下殿
なとハとうとうとうもあ
武蔵ハ和田氏うとう
しう果して
後者と云人越前

て是れに濃州西方郡に発向し振旅
無味方尾くゝみつゝに諸人て目を驚
うと程の絶と二りて同て三度合戦歟
と雖(ソキヒリ)実近(トナ)寄既に古渡(ツ)義利(ヨリ)遠(トウ)と同(ヒト)時
平伏(ヒレフ)喝(ハヤ)へ〜しとの物(モノ)
揚(ヤウ)子方曰是龍(ヒラ)顔(ガン)誇(ホコ)色(ヒ)驚(ヒ)と云
ふ事自(ヒ)然(ヒ)他(ヒ)人(ヒ)武勇(ヒ)に目を
八遠(ヒ)に聞(ヒ)も恐(ヒ)を生(ヒ)にうとき
人(ヒ)は能(ヒ)勇者(ヒ)なりと国(ヒ)中(ヒ)取(ヒ)
とうは(ヒ)八郎(ヒ)不仕付(ヒ)うと味(ヒ)なり

○濃州長狭(ヒ)
此濃野(ヒ)八郎(ヒ)き時(ヒ)宇(ヒ)三(ヒ)と云(ヒ)し(ヒ)。御(ヒ)ふ
し(ヒ)に(ヒ)て(ヒ)て(ヒ)に(ヒ)戦(ヒ)に(ヒ)く
東(ヒ)て(ヒ)さ(ヒ)う(ヒ)し(ヒ)く成(ヒ)一(ヒ)時(ヒ)切(ヒ)に(ヒ)て
も(ヒ)人(ヒ)こ(ヒ)者(ヒ)を(ヒ)味(ヒ)方(ヒ)と(ヒ)付(ヒ)し(ヒ)に(ヒ)。
来(ヒ)て(ヒ)足(ヒ)汗(ヒ)ひ(ヒ)て(ヒ)し(ヒ)て(ヒ)立(ヒ)泉(ヒ)し(ヒ)て(ヒ)。
子(ヒ)を(ヒ)者(ヒ)中(ヒ)に(ヒ)て(ヒ)立(ヒ)神(ヒ)を(ヒ)中(ヒ)に(ヒ)し(ヒ)て(ヒ)。孫(ヒ)
ち(ヒ)中(ヒ)に(ヒ)実(ヒ)に(ヒ)て(ヒ)も(ヒ)有(ヒ)人(ヒ)し(ヒ)て(ヒ)別(ヒ)り(ヒ)せ(ヒ)と
ゝ(ヒ)が(ヒ)風(ヒ)て(ヒ)て(ヒ)し(ヒ)て(ヒ)十(ヒ)年(ヒ)に(ヒ)度(ヒ)く(ヒ)ら(ヒ)て(ヒ)に(ヒ)
て後(ヒ)八(ヒ)あ(ヒ)り(ヒ)う(ヒ)大(ヒ)の柄(ヒ)を取(ヒ)し(ヒ)て(ヒ)。北(ヒ)人(ヒ)魁(ヒ)

勢ひ時ハ軍中何ともなく有て。
軍に負あるゝの後ハ世のわゝ[illegible]人思ひ
とゝ[illegible]ゝ老人[illegible]に[illegible]り[illegible]ゝ大下知
に[illegible]事ハ[illegible]に[illegible]
[illegible]あるゝ[illegible]

○武市常三

天正之初お法ノ武市常三と云者ありこれ
君を殺せり。ニ歳の孤子。常三父子三人
之甥を養育し。長ずるとゝ父之名を[illegible]
清と名付ゝ兄乃[illegible]を修理し。[illegible]知[illegible]家
賊を憎くお法ノ常三ハかゝるへ一ツ[illegible]
かゝるくおしたり
後日天[illegible]ハ[illegible]伝あるこさ人あるハ
ゝく[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

○右内大臣大久
秀右之情ゆ之事を切園たまふ。右内右
大臣と云一小物ゝ一ゝ。こ事ゝ和討入一対
対死一ゝ。右内右新加賀守大臣大久
ゝゝ二人ゝ。其長五年勢州北畠を攻ゝ
一ゝ六百ゝを分一ゝ。右内右新加賀守
かもね。こ威の孤ゝ。お将軍家康ゝ大臣大久
兄ゝ近を御縁一分ゝ新加賀守ゝ
ふ流ゝ。ゝ八。兄ゝ
ゝ。孤を長ゝ。父ゝ

せ一度中ゝ。お康ゝ今年生ゝ
臣一ゝ。孤ゝ出ゝ者ゝ
月ゝ。元和ゝ年
ゝ。ゝ。ゝ八。
一ゝ。ゝ。ゝ。
菓ゝ。晩一柳豊
ゝ。ゝ。ゝ。
板金ゝ。ゝ。ゝ。
屋一ゝ。ゝ。
城ゝ。ゝ。

一やはにて亦主の戸迫あり。あれ所に見えあり。爰
にて大脇侍郎孫兵衛さすいと恨なく田畑を
かりたしかあへき様なりと。主間席多れた
亦亮小笠原右馬頭殿の助此様なる
有一首歌一あへつる義

○北條是平右馬頭
勝れたる一巻こゝ四国の藤原是平右馬頭と云
者ありつつなりし分うれ。智徳武勇を兼備
大思し気象有一家後八人数多ありしかれ
にはとて或時郎お遣しまして一巻れ絶

ゝ八幡田作好亮なとゝ。色まつまとゝ彼
扨ゝ藤是中くゝ色ゝ乃ゝ八巻の厚
思ゝゝ事多くゝ作りなりえ乃ゝゝ一僕の
方となくくを始りん九ゝ八幡けいゝ者とゝ他
の色色くなりゝ一巻作ゝ大臣となり
始ゝ斯ゝ武蔵野合戦に対清田八郎と朱
八兵衛ゝゝ色ゝ八幡運家ゝ多ゝ家ゝ方
二人ゝ勢二ゝ八ゝ八ゝ。いさ吉野ゝ外れを送
ゝ後ゝ一巻を追んとゝ八ゝ同僚男ゝ
ゝ作ゝゝ巻ゝゝ

交生を〳〵遂しぬ。爰を意逆行わ。忠孝入わんや
せれ。爰を意逆行わ。忠孝入わんや
誠や藤長二君に仕へ給ひ。忠孝を懈く
せず。主に入て名誉の一番藤長を
初しぬ。く知れる。藤長を殺ひ。泣く古
殺にくあるさん。或問ひて藤長なり
志をあらんや。答えたるひを入こと
換答わらんや。不ならまつ世となりわさ
よ為士志を聘し。ゆく来者侍八歳四倭
刃よ剛なし所うらんか

○塩冶常刀先生吉時伝

先生吉時八尾刃之郷信濃所人也。父八塩尾
中勢廿郡吉久人とく。也人三子六人の内一也く。
尾刃ニ住郷れさるを云伝わ常刀先生童
刃仁王丸とそ。ヒ八ゆとれこうま
しく毛ちく世来なしぬ。人の人と
しまきてちく八。父の跡を云ん。ましり、
ちを人をさとて。ちゆ。ぞい。の春。軍

乃ち一番首捕ることを能はず此人は首ハ
おのれとなかくに捕ることをなおくこれをうひ
ばくに遠く笑ひ嘲りて曰く是食勢と挑ニ
合戦おひて味方失利乃ち軍を率ひて退散
しものうさをくこなたしすでに丸ハうちち
ちくこをつくくこを偽て城丸作れ光元
ををくなたしたるさまをきを逆こと
あらうに高ケとハわうたくくこを山中て来
来くくに紙に行をくくをを逆ーくハさくくハ
不タ乃首し行を丸捕ることをを捨くくを

出ることを来ることを七の友前のとおもをくーくの。
物ああるよを妻婦ハ(ヒフニン)のやうををーくを命をさを
あるをハおのをとをを姫(キヤウサリ)を我をきをハお刑山中城を
ゆくく城尾陣場能一ハ本なをーを中村或部ハ福
岡日秀ハ(ヒでこうを)ハ(ヒでこうを)ハ(ヒでこうを)

是ハ大の能く角を彩りしの上にて流さらんとして紙くや成まれ嬉のことを
思ひ出くわ十六歳の時こゝに初め
鎧の袖かく小猴を射ん八をもこうしまく
武功二十二ヶ所事ハ世ハ
宝山にて信をもてつくたくまつりて
右は横山城を攻めし時の戦場乃
事なりし由なり
秀吉乃長と呼ばれ
仕せしより飛龍天に昇る事

て雲孫二列の守護と成く男子力先生右腕
独を見る心ハ家なりしなり息お雲守
忠氏に高人又先生ハ武功を問ふ代
よ。もつと不完にしく善きりと問人はさ
ゆたりなとおもさ為よ男子けりきう
えけまハ孤しくて先生ハ板貝殿塩と人して
取ひしを又へ問まこしよりやくしたるみ
てよく云まさしかりさくうるとぞ対
忠氏聊こうにて足そて父の武功と人の
問しに答此をとすきは為ると人と他

亦男子一旦下し拙よりきるゆうと重
て同門さまに者まハぶくゆ一結を作りさ文
子のうにくも武名をとゆ強てくを作らるゆ。
いくゆえきにやしゆおゆうゆなり兇他人を
とにくらんるゆおしゆゆく恥一さるゆ。
男一旦

常力先生曰

士ゆうと武國邪武深國恩孫とかゆむゆるゆい
き報を始ゆう可ゆきゆ常強たり強
爲に此理を不ゆ他ゆるに労すハ孫を盗む

ゆうとゆゆ他邪なゆうしゆり。
國寺ハ法義を稱ハ宜一遵せんと男を
稱ゆうゆ人をくの士ハ藝を知らしあ
きに他を思ハあまとゆ思しゆるゆ
ゆとゆいゆれなりゆ。
信を公にゆ人作りしゆ織田信長ハ勇
功ハをて公の親藩でもあるゆ大臣
ゆなゆ人きゆ人ゆりしゆを奮方るゆ功を
なゆ成ゆそゆを者くしゆるゆいゆをお
りつゆを國へゆりゆ結ゆそゆ石作ゆ

て病死せしまーるものくとなすと思へ
古ハ古の格を遵ひ一心石乳を思ひ
思へハ天の冥感ふかく稍候大事にも孫上ふる
多ーと思へ

仕置者堀尾民部に雪川松に水戸人使て
云やうハ虎滝に多くかーおや。の水口をふれ
二十章 二十枚 ひらく。禍ーー成中ーーうハ。ふ
事の人ーーさるに存知先生にかくと云
ーハ多くく同心ふかりーたり人皆石審ー
ものりの事ーくおりてーいまと孫ーふやと同

ーーの沈やとよ我ーまをいまむ事あるーと絶ふる
ハ同心ふ人くくふん虎滝にハ和ふ孫人ーー
士ふの遊山ーのふり國の乱ふ及ふ時ハ敵の
寄ーー寄ーー方人ーふるーーとふを拒たりかーふ士
の魁を報ふ事ふ人。止ふんふ男ひふふ
なりふて。ふ後ハふーく色事ふ志孫ふて。
士を始ーー男ーふ。ふ事ーーふふ
さふふーーなりふ士ふ庵ふふーー時変ふ
所二二寄ふ性ふ人ふふ保裏沈ふ
きやうとーーふふーー孫一

の宰人と多く才覚一枚多く能動へ聖者ら
まーたち秀逸云に侍へ一者ニ度あり
つまりさ拙ーやと。先生はあきらめ友孫云宰
人のるなまいハ二度ハをつまたまて宣ー
かりんやニ度に及ふハ老耄ハ仲ハ似合ひきあ
るりにを毒ーやとと孫ー附二入の古心付にて
潔ーきごを後密に手にくを孫ハ幕聖ハ
心ニ之学知ル人時第庶云来地向くの徒とあん
はを列に毒く勢と呼上せハを知と合
まーきりかる所附向くの宰人の主へ立ニ人

つ御ひ伏見へ越ル人と。合力と禄んよ。又百姓
ニ百姓ハ書状にくも一の和調ク。老忠たり。宰
人く毒く孫人かーと和面ク来手国寺へ
云ーるの。一入痛ニ思人を。ル盛の時軍忠を立
ルと徹骨髄ニ思ふまハさのこもつるかるる
にし。おくきらめもとうり。孫ニ先人乃諸有家人へ
或日此拾塚屋ク来ハ持ク

能学授ニ要弟に不審ーをハ常力先生
の心結を伝えても関足とし伝ふに。ハさ法

仏義助と京豊孫童まく云ふる冠るり。
かくて子孫多く亡ひ一つのハいくにそや答曰。
長秀の父孔丈子に子孫多くあるべし。兄
弟動乱之ハあり。神と平泰時まくにも
子孫おくるとなるり

仏義助名にしおそて還て殺人事

時勢日向守大正元年丹波国を受領せり
其。徒一つ国人等一揆を起し
還て長秀武威裏く亀山を塹居之拵
有甲斐なきさまなるりハ。信長公安

吾及殺ふく。明智光秀ハ丹波国の長秀吾母方ハ波多野兄弟ハ
長秀儀川方をハ竪一揆筒井順慶ハ和合之勢三
万余義助成として四十五年八月中旬攻寄ク各
玉ハ国しと義向方くと一揆勢大軍攻寄及
攻陣者に長ハ国ふりあく長吾なり。山ハく
へハ動きなくを打破く乱妨狼藉男まく
いけらくさらハ退るんとせり。長吾刻
に成く山路と云。節所と云ハくあんまくむと。
波尾城ハ案ふく。始ハくもなさまと晩之
長ハ某に攻作付て日くまハ人を下雑兵

よ及ぶもあるむ鉄に計ひやせてのるに作
こそ。ぞ。鉄炮之組頭へ五人十人充立調ふる者
を屋とひよ名。御百余人に及ひ。ハ組一撥を付
よ加。敵合戦しそんよと。其ハ手こ。其ハいくそ
ちんやと。策しもたるか。陽西山に如こ山き
しハ急近こを。知の敵くのこ。ちく和のかも
安こ。ろ形節。屋くよハ火をとり立。谷く
ちハ敵と拳。ぞ。一撥国と。行くて何と
ま心かけよ。て。心懐に。ちさまるこ。形節
山高して雨雲。生をなく。ひつ。さ敵

さとくし。国さを。知ぬ計よ。開けまハ。四人を
使をいく敵と。不立。味方に。移ま一ちく。荷和
を取ま。影。ちく。捨ろ人。足を。敵をとろ
に。呼ぶに。付く。婦尾。敵。百人。余のろ。鉄
炮の。右に。敵こ立ま。鉄炮をうつ。ま。ハ。取
一荷和を。ま。て。一の。西。吾と。一撥。ま。さ。ま
て。色。つ。つ。さ。と。云合せ。敵。こ。ち。心。て。
急。さ。つ。ろ。れ。ハ。四人を。数百人。手。に。荷和を
れ。ま。く。ろ。に。ろ。ハ。ぞ。ろ。ハ。敵。矢。射。て。ま。ろ。ハ。ま。を
と。さ。く。や。さ。と。を。つ。て。立。ろ。十。ろ。許。に。て。百

敵人のうち鉄炮一度に嚢と射かけるうちかけたれハ中〳〵取合せ難りんをせをとゝ荷物をとゝきゝ十人許手をおひ〳〵者ゝこりんをせを蜘の子を散〳〵らす様に成しのをよりて敵なれハをひをそくらす鉄炮よりうち者十八人首摘てうりかくて荷物を取ゝ〳〵まつたる者共を切まくとて勢を呼て引さ

うり大利ハ此のけやうにて是一度作と是家に又一撰を細工と仮り是を右の山の尾さゝくと取くらす鉄炮を対けうち掛にうりをく

よりるハ仕やうもるけめと一撰し用心して中くよりも降りを是矢を対くときやくとし敵〳〵にのくさりくさ志ひぬ城尾もと高ハ大るに思ひけまハ先〳〵引るてくるゝ和よ里坂落に遠塔のをゝ様るんぬ初るもし所にて逃なをれく多くうち捨とうり十死一生の新軍也と百姓人の勢を二に分た右の山へ引く嚢と攻しけまハ物の一撰原とハるり替く一まゝ市くるんと志者まを一心を如人重石抱くゆ

つゝ勢ひ強き武士。うちはたゝかふ事。貝吹くを
しるべとして。堀尾うち出たのゝ中にて首十右乃
ごとく八討捕て。凱歌を挙てうち帰れば
らくあてゝ中を一人も不付ハ心一つに人を
を敬て固して是に打。秀吉此おいて新参
に入れと為て。ひつ。ぐ。ぐ。ぐ

て糸巻一よと作あり。我四郎右衛門尉
扶助。討捕り弓鉄炮之者たちと能名実
名を上りしく梅しく佛我四郎と云て二つ名
にておりなり。扶助人と四人と扶助に遣
首を捕らるよりて。鬼我四と云面
をさ陰侵られ。三十六之四。我四三捕りた
弓鉄炮之者にゆつりにけり。

○稲葉兄弟之事

稲葉兄弟と迯と云一八。この内人られ三好笑岑
につくゝ作りしり。十七年。三好家合戦之事。大和守と。
三好家合戦之事。朔夕二家の戦に陸と
二度合せ之事。数戦して勝ちをみよさ貴を
取りるしあまたいるりしい。城尾常力先
生篤く聴り取く甚忠しり作りさるく
主のためよ労と盡しり作りる夫ることを。
能へ八秀吉之乗年。作ることを治りん
ゑ時と迯少て八。去作紀別の山杉へ立入。材木

と多くおりつる城別木津川堂ヶ山の人な
材木あまた川よりひろう里くの長よ一格と
ろうつくり紀にさ川と筏こ入よりはたー
とさめ他の勝寝知さはよは里のたき編象に。
ゑーかうせ能行ふいさくせ久。材木流ー
てんやとあるひー。多人も入魚家材木と百人許
よてぷに侍さ三ふまて付をさーうち第乃
自回ーやうにをしに伝く塚尾善吉ハ新
倫出祥の功おりて。善吉感ーおり治
ひーくなら

○板倉伊賀守勝重八二万国碧海郡中島人也
幼官育人ゑ倫出忠孝義仁理義
明に爲ーいく穂祈名頂而重実ゆいて
幸吉行者功而不穂。ゆく六名名者伝
而善ゆ。ゆ。ゆ。則者礼而恩ゆ。ゆ重
下ゆ名恩仁深而見ゆ。ゆ。ゆ。ゆ民者ひ收
て楽ら自和七。国ゆ。ゆ倫中治ゆ幾内ゆ
く花と泰山ゆ安ゆ。ゆ。ゆ人ゆ長
ゆ八年ゆ也松泥ゆ。ゆ幸八者ゆ
なゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ民ゆ。ゆ。ゆ。ゆ

累々二代に亡て。濃夏深傾城桔
梗
或人問津四郎兵衛曰
とゝやうの事
伊賀守殿の文載判おひたゞしく私なるう
ゑに其仇をうつの事何ぞ有や
中一郎きゝ曰ら。吾日新しかまけ
めれ者もん服
状の條ハ知ずしてとも